

40年つれづれの記

横山 武

はじめに

発足以来40年というのは、決して短い年月ではない。10年一昔とか、30年一代とか世間ではいわれているが、それらを遙かに超えている。企業や役所では3年ほどのローテーションで、仕事を覚えて昇っていくらしいが、40年といえば、新人のペイペイだった人間でも、一応は上り詰めて、運が良ければ出世して、錦を飾って辞めていくのに十分な長さであろう。尤も、人間の個々の営みの体験的な時間の長さなどは、一見悠久とも見える山川や天体などの被造物がもつ時間の長さに比べれば、何ほどのものでもないことは誰にでも分かることだが、その時間を意識的に取り上げてその意義や評価をすることができるのは人間だけであることを考えれば、時間とその経過を、その長短にかかわらず大切なものとして受け止め、時間の経過が生み出す結果についても、今の時点において正しく理解し、かつ未来においてそれらを適切に活用しようと努めることは、「神のかたち」に創られた被造物である人間としての、創造主なる神の御心に従って生きる応答の姿の一つとして大切なことであろう。

日本福音主義神学会の発足40周年が一つの節目となり、今後の更なる発展のマイルストーンとして、日本の宣教と正しい神学形成のためになくてはならない存在として、福音派のみならず日本のキリスト教界の全体に貢献する神学会、さらには世界にその名を示す神学会として成長することを祈念したい。

I 日本福音主義神学会の発足まで

物事の出現は、何事でも同じだが、ある日突然一夜にしてできる、等ということはないわけで、神学会の発足も当然ながら、それなりの期待や要望をになった流れの中でスタートを切ることになったわけである。では何故、40年前に日本福音主義神学会ができたのか。どんな理由で、何が原因で、どのような時代の流れによって、いかなる教会的事情に動かされて、などなどのいろいろな要素や条件が絡み合って出来たものであることは確かであろう。

そのあたりの答えは、戦後の日本のキリスト教界の流れの中に見え隠れしているわけで、さいわい戦後の日本のキリスト教界や教会の流れや歴史についての著書や論文は少なからず公にされており、誰でもが読めるわけだが、今は先ず個人的な事柄を交えながら語るのをお許しいただきたい。

終戦（1945年）後の10年ほどは、キリスト教と日米関係の上げ潮時期で、ほとんどの事柄が期待に添って上手くいった時代であったことは、おおかたの人々が認めるところである。日米関係はさておき、キリスト教界について言えば、人々の関心は好意的にキリスト教に向けられ、教会の礼拝や伝道会に集まる人も多くなりクリスチャンの数も増えていった。これらの社会的背景としてはいろいろ考えられるであろうが、敗戦によって喪失した精神的、かつ生活的な失望感と不安感と同時に、荒廃と困窮のさなかにある日本社会を支えてくれたアメリカの物質的援助とその背後に見えたキリスト教の愛に対する信頼と関心が表裏一体となって当時の時流を形成していたといえる。

当時を代表するような出来事としては、賀川豊彦師や木村清松師らによる全国伝道の展開とラクーア音楽伝道団来日による全国巡回伝道（両者共1950年）があげられる。当時筆者は、東北の小さな町の宣教師の聖書研究会に出ていたのだが、そんな地方の無名の町にまで賀川豊彦師が来て、模造紙に墨汁で書きながら（師は黒板と白墨は使わないとのことだった）キリスト教の集會が開かれたのを思い出す。しかも町役場が会場の世話をしてくれて多くの町民も出席するという、当時としてはちょっとしたイベントだった。

その頃上京してメソジスト系のミッションスクールで勉強を始めたのだが、文学部の神学科にいろいろな神学生が在籍しているのにおどろいた（筆者は他

学科に在籍していたがクリスチャン学生として神学科の学生との交流もあったし、当時から現在までお交わりのある尊敬する先輩教職者の方々もおられる）が、さらにショッキングだったのは、自分の属している、いわゆる“福音的グループ”の市民権が、その当時のキリスト教界ではほとんど認められていないという事実を知ったことであった。

終戦後10年間ほどつづいた、日本のキリスト教界と日本文化や社会との“蜜月時代”は、現在でこそ反省をこめて語られることが多いが、上京入学した1951年頃は蜜月時代のご真ん中で、周りのクリスチャン達から受けた率直な印象は、豊かなキリスト教国アメリカが疲弊した敗戦国日本社会の民衆のために愛の手をのばす働き支援者としての特権的使命に満足している姿、とでも言うようなものであった。過去には何もなかったかのごとくに、直近目前の事柄だけに楽観的、かつ積極的に関わる姿には、意気軒昂な若者のようなエネルギーの発露があったのかも知れないと、今にして思えなくもないのだが。戦前戦中の在り方への自問と反省が表に出て来ることになるのは、種々の要因によって社会の潮流が代わってからの、もう少し後になってからのことである。

当時の日本のキリスト教界の主流と言えば、なんといっても日本基督教団であり、また日本基督教団から終戦後に直ぐに脱退した戦前からの教団・教派であった。その頃に、ミッションスクールに入ってくる学生でクリスチャン活動をするような若者は、ほとんどが日本基督教団あるいは戦前からの教団・教派の教会に属する信者であった。そのような彼らから見れば、たった数年前に日本にやってきた外人の宣教師が東北の小さな町で始めたばかりの教会が、ずっと昔から続いている自分たちの教会と同じレベルのものとは考えにくかったのかも知れない。

確かに、終戦直後のその時期は、外国からやってきた新しいキリスト教団体や教派の働きが、俗に言えば雨後の竹の子のように、日本のあちらこちらで始まった時期でもあった。にわかに増えたそれらのキリスト教の活動は、言ってみれば、敗戦という外圧的な未曾有の国家的変革によって起こった新参の働きであり、以前から続いてきた自分たちのものとは違う、いわば亜流的なものとして評価されることが多かったように思われる。あるときクリスチャンの上級生が忠告して、“君はいつも聖書ばかり読んでいて真面目だが、キリスト教をもっと

学問的に研究して、それから世の中のことも、勉強したほうがいいよ”と言ってくれたのも、その頃であった。

それらの新参グループの特徴は、後年、いわゆる“福音派”と呼ばれるようになるような神学的立場に立つ団体がおおかった。当初は、“伝道は熱心だが学問的な研究レベルは低い”という類の批評を受けることが多々あった。このあたりの事情についてごく最近に宇田進師が、エリクソン博士の「キリスト教神学」(1・2巻合本)の監修者として、〈監修者あとがき〉で、簡潔にはあるが率直にかつ分かり易く言及しておられるのでご参考までに。[M. J. エリクソン, 「キリスト教神学」(1・2巻合本), 2010年4月, いのちのことば社, pp. 250-52]

しかしそのような流れやありようも、日本の戦後の状況がある程度、社会的、経済的に安定してくると変わるようになる。キリスト教界でも変化が起こってくる。その一般的な現象としては、教会に集まる人がだんだんと少なくなっていくのだが、もう一つの変化が、現れてくる。それまで日本のキリスト教界で垂流的な評価を受けていた、いわゆる福音派のグループが大団結して、社会的なインパクトを与えることができるような宣教大会を開けるほどに成長したことである。

終戦後11年目の1956年に世界的な伝道者であるピリー・グラハム師を招いて、東京と関西で大伝道会を開いたのを皮切りに、その後は数年おきにいろいろな形で全国的な宣教の大集会在開催されていくことになる。もちろんこれらの大集会は、福音派といわれる人々や教会だけが閉鎖的な在り方で開催したわけではなく、イエスの宣教大命令を聖書の教えの正統的な枠組みのもとで推進実行しようとしている教会はみな、協力を呼びかけられたので、伝統のある古い大教会も積極的に参加協力した例も数多く見られた。むしろそのような協力の形は、さらに大きな日本のキリスト教界の一致の流れの促進に貢献するように働いたとも言えよう。

この時期に福音派の諸教会がおもに協力して行った、いわゆる大伝道会はいくつか数えられるが、ワールド・ビジョンによる大阪クリスチャン・クルセードの開催(1959)がある。2年後の1961年には同じくワールド・ビジョンによる東京クリスチャン・クルセードが開かれている。これは東京都体育館で行わ

れ、30日間で延べ約23万人に近い人々が出席したと記録されている。さらに1964年には東京福音クルセードがあり、1967年は再びピリー・グラハム師を迎えての、日本武道館におけるピリー・グラハム国際大会が開催されている。

これらの10年以上に及ぶ大集会時期の種々のイベントは、終戦に続いての蜜月期が過ぎて潮が引くように教会から人々が去っていった時期に、なおも人々の関心を福音に向けさせる宣教の大切な使命を担うはたらきであった。と同時に、戦後、個々ばらばらに日本宣教を始めた福音派の各教派・教団が〈日本人伝道〉という共通使命のもとに協力・協働する働きを通して、巧まらずして相互理解という尊い宝を共有するように導かれたという摂理もまたあったといえよう。

このような摂理的な、時間をかけたバックグラウンドの整備の上に、いよいよ福音派の神学的なバックボーン形成を志向する“学会”のための胎動が始まるのである。そしてそれは、聖書の真理に基づく、より確実で着実な日本宣教のトーチとなるべき日本福音主義神学会の誕生(1970年)へと続く道となっていた。

II 発足の頃

日本福音主義神学会の発足は、日本のキリスト教界における福音派の存在がもう一つの市民権を得るための最初のステップでもあったのだが、それはそれとして今は、発足当時の学会の興味ある特徴に目を留めたいと思う。

新しい組織が生まれて働き出すためには、何であれ一定の共通する手続きを踏んで動いてゆくものであることは誰でも認めていることであり、神学会の場合もその点、例外ではなかった。俗に言えbaum、先ず“言い出し着火マン”がおり(一人とは限らないが普通は片手以下の数)、それに“共感するもの”が少数(多くとも一桁以内)いて、彼らが相談して目的趣旨や組織の輪郭を考えて“一般の賛同者”を誘い、ある時点で発会式や設立総会をもって働きを始める、という図式である。とは言うものの、事柄が図式どおりに運ぶためには、人々の関心がそこにあり、それが関わる社会や時代のニーズが潮時である、という前提条件が必要なのである。それらの条件を欠くと、〈笛吹けども踊らず